

Special Essay

図書館との春夏秋冬

バイオ統計センター
柳川 堯

吐気がこみあげ思わずしゃがみこんだ。高校1年生の秋、図書館の開架式書架に並んだ一冊の本を何気なく手にとりページを開いたときのことである。本の名は「夜と霧」。ビクトール・フランクルがアウシュビッツ強制収容所での体験をつづった本。目に飛び込んできたのは無残な死体や、虐殺された人々が使用していたおびただしい眼鏡の山であった。最初の死体解剖の時間に貧血を起こし倒れこむ学生がいると聞かすが、それと同じショックであった。2度とこんなもの見たくない。しかし、写真が頭から離れず、その後何度か図書館に通い結局は1冊を読み通した。「人間とは一体何だろう。何であんなひどいことができるのか」高校生の私は根底からゆらぎ、おののき、人やひとが作る社会を見る目が激変した。あのとき何である本を手にしたのか。本が私を手招いたとしか考えられない。あれから50年以上の歳月がたつが、あのときのショックは私の中に深く留まっている。パレスティナ、カンボディア、ルワンダ...宗教や文明の発展とは無関係にヒトはくり返し狂気に駆り立てられ同じ過ちを繰り返している。その狂気は、果たして他人事であろうか。

大学図書館の書庫に入ったとき、見渡す限りぎっしり並んだおびただしい書籍を見て「こんなに沢山のことを勉強しなければならないのか」、「これではいくら勉強しても駄目だ。全てが先人によってすでに解明されている」という思いに打ちひしがれ、息が詰まる私がいた。大学院1年生のころのことである。

「本になっているということは、その研究が終着に近いこと、そんな研究に近づくな」と若い研究者を叱咤している私もいた。米国南部の田舎大学町に住んでいたころのことである。東大一極集中の日本とは異なり米国の大学や研究所ではそれぞれ得意とする分野で世界最先端の研究が走っている。特に田舎でそれを可能にしているのが学術図書館であった。世界最先端の研究を可能とする図書館の恩恵を最大に堪能する毎日であった。

久留米大学に着任して6年経つが、図書館や専門書を利用することはほとんどない。自分の頭だけを頼りに、医学データから情報を最大限取り出す方法を創意工夫せよ。自分の頭でトコトン考え抜け。そこからでしか、世界をリードするオリジナルな理論と方法は生まれない。くじけそうになる自分に、必死に言い聞かせながら人生の最終コーナーを走りつづけている。

